

# 視 察 報 告 書

報告者氏名：渡辺光一

委員会名：総務常任委員会

期 間：令和5年11月8日（水）～11月10日（金）

視察都市等及び視察項目：

- 大田区「OTA デジタル×Pi0（大田区デジタルプラットフォーム）」
- 飛騨市「飛騨市ファンクラブとEdyの活用」
- 金沢市「ICT活用」

所 感 等：

【大田区「OTA デジタル×Pi0(大田区デジタルプラットフォーム)」について】

大田区の町工場数は、昭和後期の10000社あったピーク時から、現在は減少しているながらも、約4200社と東京都内最大となっている。

大半が10人以下の小規模な町工場であり、作業範囲が限られている。

技術力は高いものの、単独で仕事を受けることが難しいため、それぞれの特徴を持った会社が連携して仕事を受ける仕組み『仲間まわし』という文化を生んだ。

ハブ企業と言われる比較的規模の大きい会社が仕事を受け、大手の発注ニーズに合わせ、価格やクオリティ等、最適なチーム編成をして製品を完成させるのである。

「OTA デジタル×Pi0」は、この仕組みをデジタル化していこうとするものである。

発注者は企画、設計から試作、製造までを一気通貫で依頼でき、利便性も高い。

大田区は地方創生の交付金を活用してこの一連の流れを作り、デジタル初期段階・未導入の所にはリテラシーの向上や、交流によって意識の向上をはかるといったサポートを行っている。

また中期段階にあたるデジタル導入企業には、中小企業が連携するプラットフォームとして受注の拡大のネットワーク作りを、デジタル高度利用企業には人材支援を行い、システム導入後のサポートを行うなど、各企業のデジタル化の度合いにあわせ、専門家を入れて対応している。

高齢化が進む町工場の経営者にとってなかなかハードルの高い分野であると感じるが、それぞれのレベルにあったサポートにより、作業の円滑化や効率化を高め、収益も上がる。

専門家の派遣と言っても、大田区の4200もの中小町工場に対して人材の確保はかな

り厳しいのではと感じたが、それに対しても「副業人材の活用」としてデジタルに強い人材を割り当てるといった仕組みも併せて行っているそうである。

育成は様々な場面で重要であると言える。

大田区は土地が無いいため、マンション型の建物に中小企業が一堂に会する集合型の産業支援施設(工場アパート)をいくつか用意しているとのことである。

支援にかかる年間費用が気になる場所であるが、工場アパートなどのハードにかかる維持費が大きく、年間で67億円とのこと。規模もデカイ。

大田区は税金が一度東京都に入るため、産業政策は他の自治体に比べ説得力が弱いという側面を持っているが、それでも継続できる場所はさすがである。

公の仕事と民間の仕事を分けて、継続して仕組みを維持していくことが重要であるとの考えから、ハブ企業が月額数万円の費用を負担していて、プラットフォームへの参加費用自体は無料だそうである。

大田区の特性とも言える加工技術を連携して行う「仲間まわし」の文化は、本市とは文化の違いがあるものの、この「仲間まわし」をもとに製造業の連携の仕組みを創設できれば、新たな可能性が広がるのではないかと期待が持てる。

一か所に集う形であれば横の連携も生まれ、可能性も広がるであろう。

また、高齢化にともなう後継者不足でデジタル化にはなかなか踏み出せない事業者も、サポート体制が整い、中小零細企業同士のマッチングがしやすくなれば、作業効率も上がり、事業収益の増加も見込めるかもしれないと感じた。

## 【飛騨市「飛騨市ファンクラブとEdyの活用」について】

人口減少先進地、また日本のチベット等と言われ、全国平均の倍の人口減少率である飛騨市において、人口が減ることを前提として、交流人口を少しでも増やそうという事で始まったのが「飛騨市ファンクラブとEdyの活用」である。

楽天Edyをファンクラブの会員証として活用し、観光客以上、移住者未満とされる「関係人口」を対象として応援団を設立した。

利用額に応じて会員に0.5%のポイントを付与し、別途0.1%が楽天Edyから「企業版ふるさと納税」として飛騨市に寄付される仕組みとなっている。

カードを使うと自動的に、自己負担ゼロで飛騨市に貢献できるもので、ファンクラブの会員は12000人となったそうである。

飛騨市は、アニメ「君の名は。」で脚光を浴び、聖地巡礼で観光客が増えたことをきっかけにリピーターも増加。

そこから飛騨市に心を寄せてくれる人、飛騨市が好きな人をターゲットとして、漠然とした実態の見えづらい人々を「見える化」し、取り込んでいこうと始まったのが飛騨市ファンクラブである。

本当はクレジットカードにしたかったそうであるが、それだと個人情報が入ってこないため、楽天と相談し、ご当地 Edy カードにしたとのことである。

Edy は個人情報が入っていないカードではあるが、楽天のアカウントを紐づければ楽天ポイントが集まる。

このカードを買い物で使ったら、利用額の0.1%を楽天から飛騨市に寄付できる。

ただし、当初に比べ、スマホ決済が増えてきており、Edy で買い物をする人が減りつつあるため、8000名を超えたところで普通のプラスチックカードに切り替えたそうである。

希望者には名刺をお配りしており、会員はプチ観光大使として名刺を活用して飛騨市のシティセールスに協力するとのこと、名刺の配布枚数に応じて松・竹・梅と特典を付与。

使った名刺は回収されるため、誰のおかげで何人のお客さんが来たかが把握でき、誘客に活用されている。

また、これと連動して飛騨信用組合が実施している電子地域通貨「さるぼぼコイン」なるものがある。

会員証を忘れてもスマホのアプリに表示ができ、費用は飛騨信用組合の負担となるため、飛騨市としては喜ばしいことである。

アプリの特性を生かし、会員限定で情報を通知でき、会員特典として市内の宿泊施設を利用すると2000ポイントをプレゼントするとのこと。

楽天や飛騨信用組合に費用負担してもらう分が多く、飛騨市はさほどお金をかけずに事業展開をしているようであり、そのあたりは上手というか運も味方している。

そもそも複数ある電子マネーの中で、なぜ楽天との提携となったのか経緯を知りたかったのだが、市長が議員時代に楽天とのコネクションを持ったため、そのつながりで本事業が出来上がったとのこと、少々肩透かしな理由であったが、その点でも強運が発揮されたのであろう。

諸条件を活かし、形にし、会員数も増やし、さらにそこからさまざまな事業に発展させている点は商魂たくましいと言うか、なかなかである。

当初のテーマ「デジタル」という分野からは少々離れたものとなったが、地元の協力を得て、市民や市外の関係人口をも巻き込んで地域の発展に尽くす姿勢には感銘できる視察であった。

## 【 金沢市「ICT 活用」について 】

2016年に官民データ利活用推進基本法、2020年に自治体DX推進計画等が策定されたのを鑑みて、また新型コロナウイルス感染症の拡大といった状況から金沢市デジタル戦略を策定し、できることから始めようとの想いで計画を作ったとのこと。

短期集中型で令和3年度から4年度の2年間の計画で、今年度からは「金沢市DXアク

シヨンプラン」を策定し、住民サービスの DX を進めようとなった。

金沢市デジタル戦略は、仕事の生産性を高め、職員のマンパワーを市民に寄り添った行政サービスに使えるよう、まずは行政職員の DX を進めようというもの。

逐一見直しをはかりバージョンアップを繰り返してきた。その甲斐あって半年強で一度改定を行い、更にその半年後に改定を行っている。

また、民間の有識者からなる金沢市 DX 会議なるものを設置し毎月開催している。

課題があれば時期を待たず即対応していく、といった体制で臨んでいることはスピード感もあり、市民にとっても喜ばしいことと言える。

金沢市ではフリーアドレスの導入により、デスクの上の書類が大幅に整理されたとのことである。

1~2年の計画で開始し、フロア別に取り掛かったそうだが、文書保管は思ったようにはいかず、実際に職場のスペースが確保されるまでには至らなかったそうである。

大幅にスペースが確保されたのではと思っていたので、意外であった。

大きなきっかけとなったのはやはりコロナの影響で、ペーパーレス化が進み、町内会の回覧板なども電子化のきっかけとなったそうである。

高齢者やスマホが苦手な方への対応や浸透方法が判明しなかったのは残念であった。デジタル化への大きな導入部分で人材育成が重要となってくる。

アンケートを取ってみたところ「デジタル化を進めるべき」との答えは87%もあったが、「職場のデジタル化に取り組みたいか」との問いに「取り組みたい」と答えたのは37%に留まり、「気持ちはあるが現状難しい」と答えた人が51%にも上った。その結果には正直、身につまされる思いで居心地の悪さを感じてしまった。

人材育成研修後の現場への浸透は、技術的なものよりも意識改革が必要であるとの見解であり、ギャップに悩む職員も居たそうである。

リテラシーの底上げが急務であると判断し、リーダーの育成に取り組んだそうなのだが、いかに ICT が進んでも、やはり人の力が必要とされるのだとの印象が残った。

リーダー研修によって知識を得た人が、今度は自分の部署にもどり、その知識や方法を伝え指導していく。

その中にはデジタルに強い人、苦手な人、理解力にも個人差があって、時間も労力もかかり、個人の意識改革と努力が伴わなければデジタル化を進めるのはかなり難しく、道は険しい、そんな印象を抱いてしまった。